

## 四旬節第1主日

高円寺教会 2011. 3. 13

イエズス会司祭 柴田 潔

### マタイ4：1～11

私たちは、灰の水曜日から四旬節に入り、復活祭に向けて回心の歩みを始めました。今日の福音では、イエスが悪魔から“試み”を受ける場面が朗読されました。イエスはヨルダン川で洗礼を受け、そのまま宣教に出かければよかったのに、“試み”を受けられました。それも“霊”に導かれてとあるので、“試み”を受けることは天の父の御心だったことになります。イエスは、宣教に出る前に“試み”にあう必要がありました。イエスでさえ受けなければならなかった“試み”は、私たちにとってどのような意味があるのでしょうか。今日は、宣教に向かう、私たちにとっての“試み”とは何かを考えます。

1つ目のポイントは「パン」、つまり物に頼りたくなる誘惑です。「パン」は、生きるのに欠かせない大切なもので、お金を出して手に入れます。私たちは、お金を出せば、よりおいしい「パン」を手に入れることができます。お金を出せばよりいいものが買えることはすべての富について言えます。私たちが宣教するためにも富を使います。入門講座をするにも、部屋が必要ですし、お茶菓子もあった方がいいでしょう。けれども、それが入門講座の本質でしょうか？ 物や情報は豊かでも信仰は豊かでしょうか？ 物だけ差し出して、自分自身を差し出してないということはないでしょうか？ 私たちにとって、これこそが一番大事という信仰を伝え切っているでしょうか？ もう一度、心の中を見てみましょう。お金を掛けるよりも愛をこめることを優先しましょう。

2番目の“試み”は、宣教のために、人目に付く目立つことをしたくなる誘惑です。パフォーマンスで人を惹きつけて効果的に宣教しようとするものです。もちろん、人間的な知恵や努力も必要です。けれども、目立つことを意識しているうちに、神様の思いそのものを伝えるよりも、自分がスポットライト

を浴びることが目的にすり替わってしまう危険があります。司祭ならば、人を感動させる説教をするにはどうしたらいいのか？とあれこれ考えるようになってしまう。段々と自分の技巧に走って、自分が考え出す狭い世界の神様しか示せなくなる。そのような“誘惑”に私たちは抵抗しなければなりません。どれだけ上手か、どれだけ目立つかよりも、大事なことがあることを意識しましょう。それは、信仰にどれだけ自分が賭けているかという態度かもしれません。人目を引くことよりも、自分が賭けているものをそのまま表すことを考えましょう。

3番目の“試み”は、1つ目と2つ目の“試み”をクリアした後に表れるもので、一番厄介です。ものに頼らず、人目を引くこともなく、宣教に成功したとして、その後の自分をどう成長させるかです。段々と、自分はここまでやったんだから成功して当たり前だ。周りの人は的外れだから失敗するんだ。自分は尊敬されて当然だ、と名誉心の虜になるのです。そんな人も、初めは謙虚で誠実でした。どうしたら、宣教に成功するか日夜考えて真剣に努力してきました。でも、段々と神様の恵みによって上手く進んでいることを忘れてしまいます。輝いているのは神様であって、自分ではないことを忘れてしまいます。

皆さんは、これら3つの“試み”に対して自己採点するといかがでしょうか？ 私自身を振り返ると助祭に叙階されてほぼ1年経って採点してみました。掛けられるお金もないから1つ目の“試み”はパスできているかもしれません。2つ目の“試み”も、目立ちたい訳でも、話しが上手な訳でもないのでパスできているかもしれません。3つ目の“試み”も、高円寺教会に皆さまあってと思っているので、パスできているかもしれません。そうすると、結構いい線いっているのかな？とっていました。この1年、順調にきているのかな？と思ったりもしました。けれども、どの説教が一番良かったですか？と質問すると（変な質問ですね！ 初めからいいものがいくつもあるという前提ですから）、助祭になりたての頃の、「一番最初のが良かった」というコメントがありました。つまり、あんまり成長してないということなんですかね？ それは、4月11日の復活節第2主日の、トマスにイエスが現われてくださる場

面です。逃げ去った弟子たちにとってイエスの釘跡は、心苦しく辛いものでしたが、その釘跡を見ることでイエスのゆるしも実感できた。私も、イエズス会に入ること家族に傷跡を残してしまったけれど、家族の心の痛み、傷跡を見ることで、家族から愛されていたことが理解できて、家族に犠牲を払ってもらっている分だけ、人の救いのために頑張ろうというエネルギーももらっている、という内容のものでした。

司祭となって人を助けたいという思いがストレートに表現されていたでしょう。テクニックや小細工を使わない。粗削りでも思いをこめたものが一番響いたようです。つまり、一番大事なものは、思いのたけをこめる、ということです。伝えたい思いがあれば、足りないところは神様が、また聞いている信徒の人が補ってくれることを物語っていると思います。

私たちは、不完全なので“試み”を意識して、それを乗り越えようとしても乗り越えきれない。あまりに完全なものを目指すと苦しくなって窒息する。マイナス査定になって、勢いがしぼむ。神様は、いろいろ注文を付けたりされますが、宣教で一番大切なのは思いを込めることでしょう。イエス・キリストによってあなたは救われる。そのためにわたしは何でもしたい。この熱意が、私たちが宣教する上で一番大切なことでしょう。イエスは、私たちが愛したくて、そばに置きたいから呼ばれました。そして、同じ仲間を増やして欲しいと望んでいる。このシンプルな事実を新たに受け止め直すことが四旬節の一番の意味だと思います。私たちが、信仰を新たに生き直す力をいただけるようお願いながらこのミサを続けましょう。

柴田潔神父の移動先 2011年3月27日から赴任

〒753-0089

山口市亀山町4-1 イエズス会山口修道院

メールアドレス kiyo\_44@hotmail.com